



仙北市における「地域おこし協力隊」 隊員の活動について

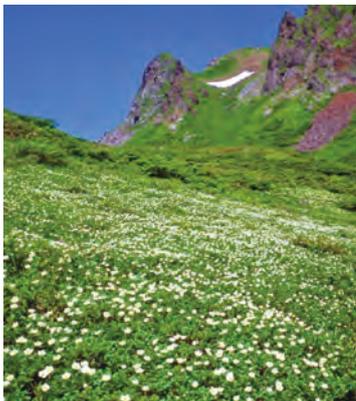
佐藤 嘉 繁

(仙北市観光文化スポーツ部次長)

仙北市は、秋田県の東部中央に位置し、市のほぼ真ん中に水深日本一の田沢湖があり、東に秋田駒ヶ岳、北に八幡平、南には仙北平野が開けています。春はソメイヨシノやシダレザクラ、ミズバショウ、カタクリの花が咲き誇り、夏は駒ヶ岳登山や田沢湖の湖水浴が楽しめ、秋は角館の武家屋敷通りや抱返り溪谷が紅葉で彩られ、冬は火振りかまくらや紙風船上げなどの小正月行事、たざわ湖スキー場のウインタースポーツなどで賑わいます。また、年間を通して乳頭温泉郷、玉川温泉にも多くの観光客が訪れています。



新緑の角館武家屋敷通り



初夏の秋田駒ヶ岳とチングルマ

コロナ禍前は多くのお客様が訪れていましたが、人の往来が制限されて3年目となりました。今年こそは多くのお客様に仙北市を訪れてもらえるよう、「地域おこし協力隊」の隊員とともに観光資源等を活かした地域づくりを進めています。新たな視点や発想による地域の活性化に取り組む4名の隊員の活動をご紹介します。

《インバウンド、グリーンツーリズムの

推進への取り組み》

東風平 詩人 (こちひら まきと) さん

東風平さんは国際教養大学卒業後の2019年9月に赴任しました。沖縄出身ですが、秋田への定住を決意して任期後を見据えた活動を行っています。地元の人や文化、自然とふれあいながら、仙北市のグリーンツーリズムの推進が主な業務内容となっています。彼は子どもの頃にネパールで生活した経験や国際教養大学で学んだ経緯もあり、語学が堪能です。それを活かして活動してもらう予定でしたが、着任後半年もたたずにコロナ禍の影響で海外からのお客様の訪問が大きく制限され、本来の活動が出来ない状況となりました。

新型コロナウイルスによる観光産業へのダメージは大きく、隊員の活動も大きく制限がされ現在は、教育旅行やインバウンドに関わる機会が少なくなり、情報発信やコロナ後を見据えた体験コンテンツの開発など、今後の走り出しに重点を置いた活動が主流となっています。

体験コンテンツに関しては、夏場は地元農家

を巡って野菜狩りやBBQを楽しむ「畑 de ショッピングフードサイクリングツアー」や新しい乗り物として注目度の高い「電動キックボード」を使ったアクティビティ商品などの開発に力を入れました。冬場には仙北市全体をフィールドに見立てた「せんぼくスノーシュー」の商品化に取り組み、ガイド育成にも注力しました。

コンテンツの商品化には成功したものの、コロナ禍による影響は依然大きく、商品の売り込みは厳しい現状にあります。しかし、東風平さんは海外エージェントとの商談会や独自のスタイルでのSNS宣伝、多数のOTAサイトの運用などを積極的に行い、厳しいコロナ禍においても着実に販売実績を積み重ねてきました。

持続可能なコンテンツ作りには担い手の不足が大きな課題となっています。東風平さんの次なるミッションは作ったコンテンツの担い手（ガイド）を増やし、担い手にとっても安定的な収入源となるよう、マネタイズを図っていくことにあります。これを彼は1人でやるのではなく、地域全体を巻き込んでアイデアを引き出しながら進めています。彼の人柄が人と人とを繋ぎ合わせ、地域観光に新たな化学反応をもたらす存在となっています。

今春、角館にある築140年の茅葺の古民家宿を事業承継しました。高齢化が進むグリーンツーリズムの担い手に自ら名乗りを上げ新たな挑戦を続ける東風平さんに今後も目が離せません。



桜満開の角館絵木内川にて

《アウトドアアクティビティを中心とした 外国人対応》

鐘 偉倫（しょう いりん）さん

鐘さんは台湾南部の台南市生まれで、2020年8月に赴任しました。台湾は2000メートル以上の山には雪が降りますが、積雪は少なく、平地では雪が降らないという気候です。日本では関東、関西、九州に住んだ事がありますが、雪国の暮らしは仙北市が初めての体験でした。

協力隊としての主な活動内容は「田沢湖自然体験センター」や「たざわ湖スキー場」と連携し、田沢湖やその周辺などで提供されるグリーンシーズンのアクティビティ、スキーなどのウインターアクティビティに関する外国人向けのガイド、インストラクター、インフォメーション及び情報発信です。

春から秋には「田沢湖自然体験センター」でカヤック、ラフティング、シャワークライミングのガイドやそのアシスタントをしています。田沢湖の湖畔は近年様々なアウトドアアクティビティの充実が進んでいます。電動キックボードでの湖畔周遊、湖上を立ち上がって進むサップ(スタンドアップパドルボート)、野外で楽しみ汗をかいたらそのまま田沢湖に飛び込むテントサウナ、ハンモックとテントを組み合わせた浮遊感を楽しめる空中テント、サップとテントを組み合わせた水上テントなど、東北ではまだ珍しいコンテンツが数多く増えています。コロナ禍で密を避けるお客様が増加したこともあり、湖畔の複数のキャンプ場には昨年多くのお客様が見えられました。また、修学旅行の目的地として田沢湖に来る学校も多く、カヤック、サイクリング体験など学生たちへの対応も行っています。

冬は「たざわ湖スキー場」で活動を行っています。スキー、スノーボードに関しては仙北市

に赴任してから始めましたが、2シーズンを終え、自在に滑れるレベルにまで上達しました。外国人がよく知っているスキー場は北海道や上越地方が多く、東北のスキー場はまだ知名度が低いのが現状です。そこで「もっとスキーとスノーボードをやりたい人々にたざわ湖スキー場を紹介したい」という思いから、在日外国人向けのスノーボード体験会を昨シーズンは5回開催しました。参加者の殆どが未経験者でしたが、ウインタースポーツに惹かれた方も多く、仙北市のスキー場や温泉、宿にも好印象をもち、リピーターになっていただけたお客様もいました。鐘さんは着任した当初からSNS発信を行っており、仙北市での生活や景色の紹介動画をYouTubeにアップしています。彼のスキーやスノーボードの滑走動画を見て、たざわ湖スキー場へ滑りに来た方もいたそうです。

外国人のお客様への対応を想定して着任したのですが、コロナ禍で在日外国人がわずかに訪れているという現状の中、1日も早くコロナ禍前のように多くのお客様が仙北市を訪れることを彼も望んでいるはずです。

鐘さんが仙北市に着任してまもなく2年になります。「仙北市には、春は花見、夏は田沢湖畔、秋は紅葉、冬はスキーと四季を感じる楽しみや、温泉や伝統行事も数多くある」と彼は言います。そんな仙北市に年間を通して観光客を増やせるように鐘さんは活動しています。



たざわ湖スキー場にて

《地域DMOである観光協会と連携した 観光地域づくり》

中山 里沙さん

中山さんは2020年9月に首都圏より赴任しました。以前、田沢湖を訪れた際に、秋田駒ヶ岳山麓のブナ森、山荘の管理人夫妻の人柄、彼等が話してくれた秋田の暮らしに胸を打たれ、何度も訪れるうちに旅行者では物足りなくなり、移住を決意されたそうです。

協力隊としての主な業務は、(一社)田沢湖・角館観光協会(以下、「協会」)のDMO事業の運営サポートです。DMOとは観光庁が数年前から導入した制度で、簡単に言うと「観光地域づくりの舵取り役」です。

DMOとして地元の熱意ある事業者と共に様々な補助金事業の採択へ向けた申請業務を行い、また採択後は将来的に持続可能な成果を目指した事業推進に取り組んでいます。

マーケティング事業においては、仙北市を訪れる観光客を対象としたWEBアンケートを実施し、年度ごとに分析結果レポートを作成して関係者と(情報)共有しています。

分析結果を観光戦略策定に利用し、事業者と共にインバウンド対応も含めた観光地域づくりの基礎整備に活かすことが大切だと考えています。

着任当初の一番大きなミッションは、「DMO候補法人」であった協会が「登録DMO」として認可されることでした。これら様々な実績を積んだことで、2021年11月4日に協会は登録DMOとして認可されました。登録DMOになったことにより、観光庁への事業申請の選択肢も広がっています。

コンテンツ造成事業としては、令和2年度から継続して取り組んでいるのが「国際競争力の高いスノーリゾート形成促進事業」です。観光

庁の公募補助事業で、秋田県内随一の規模を誇るたざわ湖スキー場を中心に、エリア全体における訪日外国人旅行者の誘客アップと長期滞在・消費拡大を目的とした事業です。ハード面整備(W i - F i 環境整備、キャッシュレス決済機能整備)やグリーンシーズンのゲレンデを活用したコンテンツ造成(電動マウンテンバイク事業、紅葉見学リフト運行、秋季スキーハウス活用など)を実施しました。

また、新たなコンテンツ造成企画として、角館エリア内にて「銘酒サロン@角館」を実施しました。酒造会社の協力をいただき、日本酒講座、試飲、お酒とのペアリングフードを楽しむ内容です。参加者の満足度も高く、今後角館エリアの有力コンテンツとなることでしょう。まだまだたくさんの課題がありますが、商品化に向けて取り組んでいます。

今年6月に、協会は(一社)東北観光推進機構より「フェニックスアワード2021」を授賞しました。コロナ禍によるアウトドアニーズに注目し、田沢湖を中心とした新スタイルのアクティビティ造成やナイトタイムの過ごし方、たざわ湖スキー場と連携した受け入れ態勢が評価されたものです。

中山さんは、昨年度から手掛けている星空観賞コンテンツ「天空のゲレンデNight Tour」なども磨き上げ、ウィズコロナの時代でも楽しめる新しい観光を模索しています。彼女は、「地域づくり」とは事業だけではなく、地域で暮らす人全員が基点となり得るものと感じています。「当たり前の風景や食事、文化のひとつひとつが宝物みたいにきれいな仙北市はとても魅力的」と話す中山さんは、今後も新たなコンテンツを生み出し、観光地域づくりに取り組んでくれることでしょう。



瑠璃色の田沢湖と電動キックボード

《地域芸術文化の振興や次世代への継承》

岩見谷 慎太郎さん

岩見谷さんは今年5月に地域おこし協力隊として仙北市に着任しました。出身地横手市から18歳で上京し、プロのDJとして東京都内のクラブやライブハウスで観客を沸かせてきました。2013年には世界最大規模のDJ大会「レッドブル・スリースタイル」に日本代表として参加し、大会史上最年少かつアジア人初の優勝を成し遂げました。その後も全国ツアーや楽曲のリリースを行ってきましたが、コロナ禍の影響で状況は一変。また、商業的になっていくDJの仕事に違和感を持つようになり、これまでのキャリアを一旦リセットして生き方を見つめ直そうと思いはじめたそうです。

そうした中、昨年訪れた田沢湖の自然の素晴らしさに感動し移住を考える様になりました。「自分の中では田沢湖は水のシンボル。音楽活動やイベントを通じて水の大切さを伝えることができれば」と思い、地域おこし協力隊に応募したそうです。

岩見谷さんの主な活動内容は地域芸術文化の振興や次世代への継承です。田沢湖や古民家などを舞台に音楽と芸術をあわせたイベントの開催や地元の人たちとの交流を通じ、仙北市の文化芸術や自然の素晴らしさをDJの経験や人脈を活かして国内外に発信する事を彼は思い描いています。



八幡平ドラゴンアイにて



「がっこちゃっこラジオ」収録中の
中山さんと東風平さん



「がっこちゃっこラジオ」の
LINEにつながるQRコード

仙北市地域おこし協力隊の連携した取り組み

仙北市では平成27年度から上記の4名の現役隊員を含めて、9名の協力隊員を採用しております。

令和3年からは、幅広い分野で活躍する市民にスポット当てたトーク番組を制作し、インターネットで配信を始めました。番組名は「がっこちゃっこラジオ」です。毎回市民をゲストに招いて仕事、仙北市の魅力について語り、お茶の間に届けています。これは情報発信もさることながら、番組制作を通して、隊員同士が共同作業によって連携を高めるとともに、地域の様々な分野で活躍している市民の方々と交流を深める良い機会になっています。

また、令和4年3月23日には、市民の皆様向けに1年間の活動内容や取り組みを共有する目的で、オンラインの活動報告会を初めて開催しました。

仙北市地域おこし協力隊は、個々の活動分野に加えて、隊員同士で連携した活動も行うことで、仙北市の地域活性化に取り組んでいます。



「活動報告会」開催中の
鐘さん(左)と東風平さん(右)
(中央は仙北市国際交流員、黄敏さん)